

(勝軍地藏・万徳院蔵)

日々好日

六八五号

(令和八年三月発行)

選挙も一つの戦争ですが急ごしらえの部隊、中道改革連合の負け振りは見事というしかありません。木っ端微塵に叩き潰された感すらありますが、空中分解するの将来に向けて捲土重来を期すのか、注目に値する。

その勝者たる高市政府与党も歴史的な勝利の高揚感に浸っている場合ではありません。総理が決断すれば何事も実現する議席を獲得した責任政党なのですから。それでも総理が目論むすべての政策の実現を白紙委任されたのだと勘違いしないでほしい。

総理の歯切れのよい分かり易い言葉で説明をしてほしいことは山ほどありますが、老骨には経済政策一つにしても全くと言っていいほど理解はできませんが、何よりも心配なのは戦争をする国になるのではという不安である。

選挙当日、日本中が降雪で白一色に覆われたように、戦火で国中が焦土と化すようなことにならないことを念じるのみである。そのためという軍拡も素直に容認はできないのです。

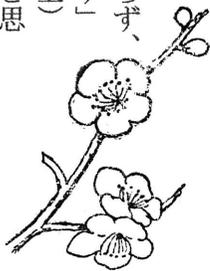
高市総理のあの笑顔がひきつる日の来ないことを願わないではない。

弘法大師のお言葉

「三界の狂人は狂せることを知らず、四生の盲者は盲たることを識らず」

(秘蔵寶鑰卷上)

(心驕る者は己の総てが正しいと思
い、智慧無き者は正しくものを見る
ことが出来ない)



聖人
業投

賢者
説黙

機深
浅随

時待
人待

好日

◇◇ 中道は涅槃への道 ◇◇

佛教徒、それも僧侶でありながらこのところ意識することのなかった「中道」という言葉を耳にしたのは唐突なことであった。

それは言うまでもなく今回の衆院選のきつかけともなつた衆院解散時の立憲民主党と公明党が合体しての「中道改革連合」の発足である。

その選挙の結果は先述の通りでしたが、中道という佛教用語をもちいたことが古臭くA Iの時代にそぐわないものだとして国民の支持をえられなかったという一面があるのではないかとはいわれています。

私たちは大きな歴史の転換期のうねりのなかにいることを意識しないではありませんでしたが、ここで佛教の「中道」とはどういうものなのかをみてみましょう。

佛教でいう中道は単にAとBの二つのものの真ん中というような消極的なものではありません。両極の正しい中間をいう中庸とも異なります。

天地大自然の真実は縁起の法に基き偏つた見方や執着からはなれた智慧といふべきものである。先ず中道の義を経典によつてみてみましょう。

「仏は二論（断見、常見）に於いて各一辺を許す。断を離れ常を離れるを而も中道と説く」（大毘婆沙論第四十九）

「常は是れ一辺、断滅は是れ一辺なり。この一辺を離れて中道を行ずる。これを般若波羅蜜と為す。又復、常と無常、苦と楽、空と実、我と無我もまたまた是の如し」

（大智度論第四十三）



「所得あるを辺見となし、一切の情執を蕩盡して畢竟清浄なるを名づけて中道正観となせるものなり」

「五比丘、常に知るべし。二の辺行あり。諸々の為道者は常に学ぶべからざるところなり。」

一に曰く、欲楽に著す。下賤の業にて凡人の所行なり。

二に曰く、自ら煩い自ら苦しむ。

賢聖の法に非ず。無義と相応す。

五比丘、この二辺を離れて、中道

を取ることをあらば明を成じ、智を成

じ、定を成就して而も自在を得て智

に趣き覺に趣き、涅槃に趣く。謂く、

八正道なり」（中阿含經第五十六・羅摩經）

經典の教説は枚挙に暇ないほどありますが、繁雜をおそれこれくらいにしておきます。

お釈迦さまが中道を唱えられるようになったのは、小国ながらも釈迦族の王子として誕生され、蝶よ花よと大事に育てられ何不自由なく育てられました。ある時、城の四つの門のそれぞれで、老人を見られ、病人を目にされ、また葬列に遭遇され、世の無常を知られたのです。そして最後に気高い姿の出家修行者を目の当たりにされて、榮耀榮華の生活を厭うようになられたことがあげられています。

この思いは捨てがたく29才の時、お城を愛馬カントカに乗って出られ出家者の仲間に入られたのです。六年の間苦行を続けられたのですがさとりに至ることはできませんでした。

そこで苦行林を出られ苦行で汚れた体を尼連禪河（ナ



イランジャー河）で洗い清められ、村娘スジャータの供養した乳糜（乳粥）を食して体力を回復され、傍らのピツパラ樹（菩提樹）の下で端座瞑想され七日の後、大悟成道されたと伝えられています。

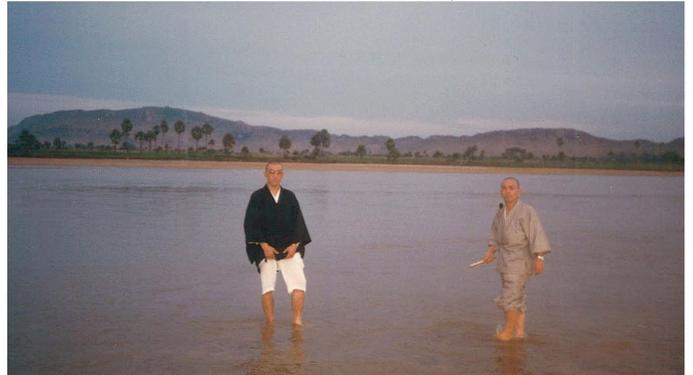
この苦行体験を止められた経緯が中道の教えに繋がると教えられています。

お城での快樂と苦行の両極を離れた調和のとれた精神状態が、正覚を成就せしめたということとなります。

苦行は悟りへの道ではないとして苦行をやめられたおシヤカさまは曾ての修行仲間から非難をされましたが、おシヤカ様は「修行者よ、出家者たるものは近づいてはならない二つの極端がある。一は欲望に耽り快樂を樂しむことである。

今一つは自らの肉体苦しめることである。この両極端の修行は無益であり、近づいてはならない」と宣せられています。

先に揚げた経説にもありましたが、常見とは世界が永遠に存在するということであり、断見とは死ねば総ては無に帰するということです。釈尊の悟られた縁起の法によって総ての存在は諸行無常であり、諸法無我なることが理解できます。



（尼連禪河・前正覚山を望む）＝昭和60年10月6日

つまり、中道とはこの縁起の道理を正しく理解し、それに基づいて偏りのない見方、考え方、生き方をすることです。

中道はこれにより、苦しみからの解放へと繋がり涅槃への道に至る生き方ということが出来ます。

この中道の実践的な方法として「八正道」が説かれています。

【八正道】

- 正見……正しい見解（縁起の法や無常・無我などの理解）
- 正思惟……正しい考え方（貪欲や怒りを離れての思考）
- 正語……正しい言葉（ウソや悪口、二枚舌などを避ける）
- 正業……正しい行い（殺生・盗み・邪淫などをしない）
- 正命……正しい生活の手段（倫理的な生活）
- 正精進……正しい努力（真理に向かうたゆまぬ努力）
- 正念……正しい気付き（心の散乱、沈滞を避ける）
- 正定……正しい精神統一（瞑想による精神統一）

この八正道の実践こそが中道の生き方であり、それは縁起の法なる智慧で総ての存在は無常にして無我なるものだとしてあらゆる偏見や固定観念から解放され、苦を抜き樂を与える慈悲の心を生じ他者への無関心から解放される。

中道の生き方はこの智慧と慈悲の両輪でバランスのとれた偏りのない生き方ということが出来ます。政党名としてはともかく佛教徒にとつては八正道・中道の生き方は身についたものでなくてはなりません。

それは涅槃への道であり、また太陽が真東から昇り真西に沈むお彼岸のお中日は中道に比せられていることは仏教徒であれば承知のことです。極楽浄土に往生した先亡諸精霊に供養の誠を捧げる日でもあります。心してお彼岸を迎え佛教徒であることを自覚したいものである。

被災者 供養

去る一月十九日付の中国新聞の社会面に、一月六日に発生した島根・鳥取地震（岩国では震度三）について、広島大学のチームが現地入りした記事のすぐ下に「関東大震災死者45府県に本籍」と題して高野山の名簿云々の記事が目にとまりました。

それは大正12年9月1日に発生した関東大震災の10万五千人の死者の内、5万9千人の本籍が当時の45道府県に及んでいたというのですが、それが高野山奥の院の関東大震災横死者供養塔（霊牌堂）に納められた5万9千人のタイル製名簿を元神奈川大特任教授の北原糸子（日本災害史）らが調査分析されたという。

北海道	73人	滋賀	305
青森	119	京都府	111
岩手	148	大阪府	124
宮城	371	兵庫	1
秋田	30	奈良	18
山形	148	和歌山	41
福島	506	鳥取	24
栃木	713	根山	81
群馬	32	島山	21
埼玉	142	岡島	88
千葉	1628	広山	5
東京府	3万6420	山川	19
神奈川	1万4588	香媛	51
新潟	366	愛知	36
富山	168	福岡	60
石川	113	佐賀	34
福井	152	長崎	12
山梨	18	熊本	75
長野	633	大分	28
岐阜	127	宮崎	22
静岡	454	鹿児島	73
愛知	190	沖縄	81
三重	194	外国人	210

高野山に納められた関東大震災タイル版死者名簿の本籍地別内訳

※茨城、徳島両県はゼロ

この関東大震災霊牌堂は当時の東京市長であられた永田秀次郎氏が私財を投じて建立されたもので、遺骨が収納されていることは承知していましたが、霊名簿が納められていることは知りませんでした。

それも紙の名簿ではなく一万年の保存に耐えられるようタイルに焼き付けられたものという。

そのタイルは378枚の表裏両面計756面に焼き付けられた名前を撮影、東大地震研究所助教授の大邑潤三（地理学）と分析されたものという。その中には皇族3人、外国人210人が含まれていたという。

この霊牌堂は奥之院の一の橋から百数十段ばかりのところであり、草繫全弘師僧の墓地に隣接しており、墓詣り、奥之院大師御廟参拝の折には目に入り意識し瞑目合掌していました。

高野山奥之院の二の参道沿いには二十万とも三十万ともいわれる供養塔がありますが、全国各地の大名の巨大な五輪塔が数知れずあります。

また、中の橋駐車場からの参道沿いには企業の供養塔が所狭しと建てられているのは御承知の通りです。

被災者供養と題しましたが、地震や豪雨などの天災のほかには戦災の供養塔・慰霊碑なども十指に余るほど



（阪神・淡路大震災供養塔）



（関東大震災供養塔・霊牌堂）

凶年少の比丘の迷い



仏は舎衛国の祇園精舎に在し、天、龍、鬼神、更に国王、人民の為に法を説いておられました。

その時、一人の年少の比丘が早朝より法服を着け、鉢を持ち錫杖を突いて乞食（托鉢）に出掛けていきました。その道のほとりに菜園があり、キビを育てていました。その周囲に害虫、獣、そして盗賊の害を防ぐために草の中に見えないように糸を張り、触れると箭を発する仕掛けがしてありました。

一人の美少女がその菜園を守っていました。少女はその仕掛けに気付かず近づく人にそれとなく行くべき道を教えていました。

少女の指示に従わなければ箭に射られて怪我をし、死ぬこととなります。そんな時、少女は悲しみの歌をうたうのでした。

その声は妖しく人の心をうち、聴く者は車を降り、馬を止めて少女の前に至りいつまでも前に坐して歌を聴いていました。

時に、彼の年少の比丘は乞食を終えて、偶々少女の歌を聴いて魅せられて心乱れ惑い平静でいられなくなつたのでした。

比丘はおそろおそろ近付きその美しさに意志定まらず、手にしていた錫杖や衣鉢を失うもそれさえも気付かぬ態でした。

仏は遙かにそれを知られ、比丘がこのまま進めば箭に射られて死ぬことになるので、比丘の愚かさを憐れみ、済わんとして、自ら白衣を着け一人の在家（俗人）者となりてそのあたりに至り、偈をもつて比丘を制して告げ

られました。



若き沙門よ、何処に行くや 心に戒をもって制御せず
一歩一歩思いに従つて行く、 袈裟、肩にあるを失うも知らず

このまま進めば悪道に墮す、 少女の妖しき歌声を聴くを止め

自ら持ちし欲心を却けよ 人は欲に向かつてひたすら走る

これを為せば為せ 今、自らを制することなくば

家をすて出家した志を失う 意、妖歌に酔い、行、志を失う
意、妖歌に酔い、行、緩めば 誘いに負けて命を落とす

浄き梵行を修して 得難き無畏の大宝をつかめ
心、調わずんば誠め難く 風の樹を枯すが如し

自ら為すべきは御身の為なり どうして佛道を精進せざるや

仏はこの偈を説き給いて、俗人から仏身に復し給えり。相好炳然として天地を光り照らす。

その場に居る者は欲望の迷いは解け、心の乱れがとまりました。

人々はそれぞれ平靜な心を取りもどすことができました。

比丘もまた、光輝く仏を見奉り、心意、冥より明に転回す。

そこで五体、地に投じて仏の為に礼を為し頭を叩き過ちを悔い懺悔し仏に謝りました。

そして心実り羅漢の悟りを得て仏に随つて精舎に還り、それを見聞きする者は皆、法眼を得たり。

あとがき

一月十八日の初観音は風もなく好転に恵まれ、久々に駐車場も満杯になり盛況とはいかないまでも滞りなく終えることが出来、節分の星祭りも元気につとめることが出来て一息ついています。

これらの行事や檀家さんの仏事などでは必ず法話をさせていただいています。それは難しい佛教の教義の解説ではなく、年齢を重ねて身に付いた老僧の心情の吐露の一点に留まっているかの感もありますが、それでも仏智に副い大師の衆生済度のみ心に通ずるものであると確信しています。現代の社会生活は老人にはついていけないものがあります。若者とは異なる多くの経験知も多様な価値観が交差する世の中で安穩な人生をおくることに役立つこともあるのではと…。

過般の雪降る中での衆院選挙の結果がもたらすものは民意とはいえ我が国は、私のような老人の思いをはるかに超えて大変容するであろうことは間違いはありませんが、それが弱きものを見限る国とならないことを切望してやみません。

北海道や東北そして北陸などは豪雪で生活も難渋されていることですが、太平洋側は少雨でダムが底をみせはじめています。雨も雪も程々であってほしいものですが、思うようにはまいりません。科学万能の時代ですが、そうではないことを知らされることも数知らずあります。謙虚に堅実に生きたいものです。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡光昭



白馬に跨る

勝軍地藏

境内守護の

愛宕大権現



散華

鎧甲で騎乗して

衆庶守りぬ

慈悲の極みの

地藏頼し

岩国市通津3634番地3 〒740-0044

高野山真言宗

宝池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611